真夏の夜の夢

喜多不二夫

私の知り合いの女性の話。

私と彼女はたまに食事に行く。すると私の注文したものが先に来たにも関わらず彼女は私より早く食べてしまう。焼肉など行こうものなら帰りの会計が心配になる。

しかし、彼女の記憶力の良さは群を抜いていて私が忘れていることをほぼ正確に覚えてる。特に日付けとその日の曜日、なにがあるかを正確に答えてくれる。時には私のほうが全く覚えていなくて叱られる。

彼女がその力をいかんなく発揮したのは私の親父が亡くなった時の遺品整理である。彼女は手際よく片付け、電光石火あっという間に終わった。そして散らかっていた部屋もあっという間に片付けてしまった。ものが捨てれない、整理ができない私からしたらまさに神技だった。

その一方で彼女宅にWiFiがついた時「ワイファイ」が言えず「ワイワイ」と言っていた。が、練習の結果今ではきちんと「ワイファイ」と言えるようになった。

完璧に見えた彼女だが意外なところにアキレス腱があった。

そして夏がきた。私の市でも花火大会がある。この花火大会、我が家から歩いて7、8分の距離が会場で、私とその彼女もよく花火大会に出かけた。彼女の場合花より団子。花火より屋台であった。家人や弟家族もビールを持ちツマミを片手に花火大会を見に行く。目の前で花火が打ち上がり、仕掛け花火もよく見える。大変壮観である。特に仕掛け花火の迫力には圧倒される。

浴衣のカップルもそこかしこにいる。あるいは小遣いをもらった子どもたちが屋台に並んでいる。微笑ましい光景だ。

さて、私には甥っ子が三人いる。一番上の甥っ子は彼女を連れて会場にいる。だが、あの人混み。どこにいるかわからない。しかし、一番下の甥っ子が「あそこにいるよ」本当か？たまたま私の弟がステンドグラスを持っていて見てみると確かに上の甥っ子が彼女連れでいる。「なぜわかる…」不思議な現象だった。

今ではすっかり様変わりしてしまった。甥っ子たちもそれぞれ独立してもう私達の手の届かないところへ行ってしまった

そう、花火のように儚く、一夜の夢だったかもしれな、うん。